**尾添下山仏社**

**下山仏：山を下る仏像**

**尾添白山社**

**石川県指定有形文化財**

この小さな神社で保管されている数体の仏像と鐘は、かつて、加賀禅定道という白山に続く主要な参詣道の一本に沿って立っていた複数の小さな寺に安置されていました。8世紀から神聖な場所とされてきた白山は、以来800年以上にわたって修験道という仏教、神道、山岳信仰を融合した宗教の中心地でした。

しかし、日本に大きな変化が起こり、近代化が急速に進んだ明治時代（1868-1912）のはじめに、新政府は密接な関係にあった神道と仏教を分離するよう要求しました。これにより、多くの寺院や仏像が破壊され、白山の仏像も壊されそうになりました。地元の人々は、慣れ親しんだ仏像をひそかに回収し、白山から運び下ろしました。仏像は尾添白山社に隠され、今でもこの場所に保管されています。これらの仏像は親しみを込めて「下山仏」（山から下りてきた仏様）と呼ばれています。

最も古い二体は、1216年につくられた木造阿弥陀如来立像と1636年につくられた木造十一面観音坐像です。このほか、銅造地蔵菩薩像（1700年）、銅打出不動明王立像（1702年）および脇侍の金剛童子像、そして数体の地蔵があります。梵鐘も1基収蔵されています。

白山市